

「気づきMEMO」の提出行動は学年でどう変わるのか

～ 学年段階の比較から、「気づきMEMO」を再評価する～

同志社中学校（中学2年生 社会科 地理的分野担当） 井口 和之

右のQRコードより、追加資料をぜひご参照ください。



実践背景（課題の整理）

2024年度実践の総括
「気づきMEMO」とは、授業の振り返りを日常化し、提出物を「教師に評価される成果物」から、「自分の学びの記録」へと位置づけ直すことをねらいとして設計したもの。2024年度実践(中3)では、「評価対象ではない」にもかかわらず高い提出率が確認され、さらに、**共有 → 模倣(リミックス) → 称賛**という他者との関係性の中で自己肯定感が高まり、それが自己調整学習の“自走”を支える可能性が示された。

2025年度の実践の課題
同一の設計思想でも、中2では、発達段階、学級集団の文化、同調圧力の受け止め方、あるいは学習内容の抽象度・負荷の感じ方などが異なる。本実践は2025年度に中学2年生を対象として実施した「気づきMEMO」の結果を、2024年度と比較し、「評価対象ではない提出物」が学習習慣として成立する条件を検討することを目的とする。

実践方法（「気づきMEMO」の設計と予想）

「気づきMEMO」の設計
「気づきMEMO」とは、生徒が「その日の学びで印象に残ったこと/気づいたこと」を短く記録し、ロイロノートにて、提出・共有する仕組み。
① 毎回の提出を義務化せず任意提出とした。
② 提出されたものをクラスで共有し相互参照、模倣を促した。
③ 学期末に生徒自身が任意のものを2・3枚選び、それのみを評価対象として登録させた。それ以外のものは、評価対象としない。
これにより、日常の提出を「評価される作業」から切り離し、提出の自由度と学びの主体性を確保することをねらった。

2025年度の予想と実践の工夫
今年度の実践では、提出率が低下すると予想していた。その上で、
① 学年が下がることで自己調整の成熟度が異なる可能性がある。
② どのような単元、どのようなタイミングで提出状況に変化が生じるかを確認できるようにする。
③ 学期末アンケートで提出理由を確認できるように工夫する。
提出率が低下することを想定しているため、②や③でより詳細に分析し、「気づきMEMO」の実践を再評価したい。

結果と分析 ①

2025年度 提出状況	全提出	未提出1枚	未提出2枚	未提出3枚以上
1学期（計/9枚）	97	29	27	139
割合	33.2%	9.9%	9.2%	47.6%
2学期（計/12枚）	70	35	17	170
割合	24.0%	12.0%	5.8%	58.2%

「全提出」の激減！
59.9% → 24.0%
(2024) (2025)

2024年度 提出状況	全提出	未提出1枚	未提出2枚	未提出3枚以上
1学期（計/9枚）	168	37	16	69
割合	57.9%	12.8%	5.5%	23.8%
2学期（計/13枚）	175	37	15	63
割合	59.9%	12.7%	5.1%	21.6%

「未提出3枚以上」の激増！
21.6% → 58.2%
(2024) (2025)

1学期 提出数	ガイダンス	S.Jobs 1	S.Jobs 2	F・H・R・I・G	アララック	リサーチ	アララック	ストーリー	思い出の整理	平均
提出者数（/292）	275	248	246	224	221	166	173	136	174	207
割合	94.2%	84.9%	84.2%	76.7%	75.7%	56.8%	59.2%	46.6%	59.6%	70.9%

2学期 提出数	東北1	東北2	中部1	中部2	中部3	四国1	四国2	九州1	九州2	中国1	中国2	中国3	平均
提出者数（/292）	198	204	228	206	202	190	137	183	202	157	174	148	185.75
割合	67.8%	69.9%	78.1%	70.5%	69.2%	65.1%	46.9%	62.7%	69.2%	53.8%	59.6%	50.7%	63.6%

(分析1) 中2は提出が“文化”になりきらない。
提出を「自走」させる文化が学級集団として確立していない or 個人の自己調整が間に合っていない。(← 定性的分析が必要。)
(分析2) 2学期で差がさらに拡大＝“加速する脱落”が起きている。
提出が“積み上がる活動”であるがゆえに、数回抜ける → 追いつけない → さらに抜けるという構造(累積遅れ)となる可能性が高い。
要因として、課題の負荷、提出の手間、提出の意味づけ、学期の生活リズムなどが複合的に重なっていると予想される。

結果と分析 ②

「気づきMEMO」についての生徒の受けとめ	2025年度	2024年度	「気づきMEMO」提出理由	2025年度	2024年度				
現在のように任意の枚数を提出するのよい	178	66.2%	105	47.7%	自分の学びの記録として提出したい	96	35.7%	66	30.0%
全員が毎回必ず提出すべき	26	9.7%	33	15.0%	定期テストがない分、これくらいはやろうと思う	101	37.5%	83	37.7%
友だちから学べるので「回答共有」でよい	163	60.6%	150	68.2%	学期末のレポート課題などで振り返るため	51	19.0%	69	31.4%
コピーされるので「回答共有」すべきでない	32	11.9%	8	3.6%	友だちの提出物を見ると自分もがんばろうと思う	60	22.3%	24	10.9%
「回答共有」なので意識的にがんばった	78	29.0%	60	27.3%	友だちに見てもらうことも自分のためになる	15	5.6%	8	3.6%
「回答共有」なのでストレスを感じた	34	12.6%	11	5.0%	特に深い意味はないが自分にとって良いと思う	114	42.4%	68	30.9%
自分の学習方法に合っていると思う	127	47.2%	87	39.5%	ロイロの機能で「募集中」「未提出」が嫌だから	127	47.2%	92	41.8%
「ノート点検」されるほうがよい	29	10.8%	22	10.0%	周りにサボっていると思われるのが嫌だから	27	10.0%	11	5.0%
「ワークシート」より「気づきMEMO」が重要	91	33.8%	48	21.8%	ただなんとなく	75	27.9%	18	8.2%
「気づきMEMO」より「ワークシート」が重要	44	16.4%	22	10.0%	上記にあてはまるものがない(そもそも3枚)	29	10.8%	33	15.0%
その他	12	4.5%	0	0.0%	回答者数(在籍者数 2025:292 2024:290)	269		220	

POINT 「気づきMEMO」を評価しつつも、「回答共有」の肯定的評価は減少！

POINT 「内発的動機」が最上位ではない！「ただなんとなく」も多い！

理由が存在しても行動に結びつかない層が厚くなっていることから、提出が学習習慣として安定するためには、理由だけではなく、成功体験の蓄積、ルーティン化の定着、称賛や承認が伴う共有文化の形成、単元負荷の最適化など、行動を支える条件が必要であると考えます。

生徒の学力についての考え方	2025年度	2024年度		
テストで測定しにくい暗記型ではない学力が多い	120	44.6%	110	50.0%
テストの代わりに提出物で測ることが可能	101	37.5%	81	36.8%
暗記すべき知識もあるのでテストを用いるべき	43	16.0%	56	25.5%
暗記すべき知識はあるが提出物で評価できる	132	49.1%	73	33.2%
ネットが発達した現在、暗記に頼るべきではない	55	20.4%	39	17.7%
学力は個人に備わるといふよりグループに備わる	—	—	84	38.2%
学力は結局、個人に備わるものである	—	—	40	18.2%
成長を実感するのは自分なので主観が大きい	61	22.7%	46	20.9%
主観に頼るとあいまいだと思う	47	17.5%	38	17.3%
他者との比較ではなく以前の自分との比較	97	36.1%	73	33.2%
以前の自分ではなく周囲の人(他者)との比較	37	13.8%	15	6.8%
その他	10	3.7%	0	0.0%
回答者数(在籍者数 2025:292 2024:290)	269		220	

POINT 「提出物」による評価に期待している！だからこそ、提出率に「差」が生じていることが検討すべき問題として浮上する。

(分析1) “学力＝暗記テストで測れるものだけではない”は、両年で安定的。
(分析2) 2025は特に、知識の必要性は認めつつも、評価をテストに閉じない「提出物による評価の肯定」が強いが、それが提出行動には結びついていない。

「気づきMEMO」の具体例(定性的分析)



これらは、同じ生徒の1学期から3学期までの「気づきMEMO」である。年度当初は「感想」、2学期は記入が減り、3学期は独自に調べたことをまとめたり、オリジナリティがしっかりと表れ始めた。



これらは、普段から真面目で、授業内容をしっかりと記録している。いずれのカードも、教員の説明を見やすくまとめたものとなっているが、一方で生徒自身の考えは記入されていない。「気づきMEMO」の自由さ(余白)をまだまだ理解できていない様子。

考察と今後の課題

自己調整学習を「自走」させるためには
最も重要な発見は、2025年度(中2)において、「気づきMEMO」の理念(任意提出・回答共有)が肯定的に受け止められているにもかかわらず、提出率が大きく崩れた点である。言い換えるなら、「良いと思う」と「継続して行く」ことの間ギャップが存在した。このギャップは、2024年度(中3)実践で示唆された「共有 → 模倣 → 称賛が自己調整学習を自走させる」という評価を問い直す必要があることを示す。学年差や条件差のもとでは、理念だけでは提出の継続が成立しない可能性がある。「提出が継続した生徒/崩れた生徒」の事例を抽出し、そこから、“飛躍した(成長した)瞬間”や、“崩れる瞬間”の提出物・コメントなどを追う、個別事例の検証が今後の課題となる。